# つながりを永遠に

～日本赤十字社が結んだ絆～

vol.4 全7回

## 石巻赤十字病院（石巻市）看護師 佐藤大輔さん（28）

# 「何かできないかと自然に動いていました」

佐藤さんのメッセージを動画でも公開中

取材時の様子を短編の動画にまとめました。右の２次元コードからアクセスしてください。

東日本大震災で日本赤十字社が行った支援活動などを振り返る企画。今回は避難先の小学校で救護活動を率先した石巻赤十字病院の看護師佐藤大輔さん（28）の体験にフォーカスします。

## 被災時は看護学生　避難所で救護率先

天井にあったエアコンのカバーが「ガシャン」と音を立てて落ちた。机の下に身を隠し、揺れが収まるのを待った。10年前のあの日、海からも川からも程近い石巻市吉野町の石巻赤十字看護専門学校にいた。

当時は1年生。津波が来るとの情報を受け、当時学校にいた学生84人は教職員10人の指示で約300㍍離れた指定避難所の湊小学校に向かった。半分進んだところで、近くの建設現場の屋上から声が飛んだ。「逃げろ!」「急げ!」。危険を察知し、杖をついた高齢女性を同級生と交互

孤立した湊小から救助されるまでの3日間で、佐藤さんらが口にできたのはコメ菓子2枚と水200ccのみ。多くの人が脱水状態に陥る過酷さだった

におぶって走った。校舎に入った直後、背後で「ズドーン」。津波が門を壊す音がした。間一髪だった。

しかし、本当の試練はそこからだった。湊小は校舎１階が水没し、陸の孤島と化した。2階以上の教室は地域住民ら約1300人でごった返した。津波にのまれてずぶ濡れの人も、大ケガを負った人もいた。寒くても停電で暖は取れず、飲食物は皆無。低体温や脱水で体調を崩す人が相次いだ。

教職員が重篤者の救護などに当たる中、佐藤さんらは自発的に動いた。教室にあった小学生のジャージを借用し、寒さを訴える人をくるんだ。トイレが排せつ物であふれたと聞けば片付けに走った。心細そうにしている人の隣に座り、夜通し背中をさすることもした。

「医療的なことはできずとも、目の前の人に何か少しでもできることはないかとみなが考えて、自然に動いていました。心の中には『自分たちは赤十字の看護学生なんだ』という自負がありました」。14日夕に救出されるまでの丸3日、当時18、19歳の面々は避難者でありながら、赤十字の理念「人道」の実践者であり続けた。

専門学校は校舎の被害が大きく使えなくなった。そのため11年6月、石巻専修大の一画を間借りして再開。津波被害がなかった石巻赤十字病院の敷地に建てた仮設教室で3年間をしのぎ15年5月、病院東隣に新築移転した。

宮城県柴田町出身の佐藤さんは石巻で一人暮らしを続けながら13年3月に同校を卒業。石巻赤十字病院に看護師として採用され、16年から救急救命病棟に籍を置く。事故や急病の患者をケアしながら、気が動転しがちな家族のサポートにも気を配る。

「振り返るとあの3日間には、もっと知識や技量を高めておけばよかったという悔しさもありました。なので在学中は『いざという時、本当に役に立つ人間になろう』と真剣に学びました」。実習の比ではない被災経験が、医療の道に進む決意をさらに強くしたという。

新型コロナウイルス感染症という新たな渦中で迎える震災10年。佐藤さんは「あの時思い知らされた『日常のありがたさ』を、またかみしめる日々です。いま生きていることに改めて感謝しながら、患者さんとその家族に寄り添っていきたい」と決意を新たにする。看護師の卵だった若者はいま本物になって、最前線に立つ。

勤務先の石巻赤十字病院の前に立つ佐藤さん。10年前の経験を胸に救急救命の現場に立つ＝2021年1月、石巻市蛇田



企画・制作/河北新報社営業部